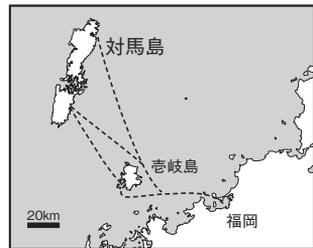


地域資源のデザイン化と

生物多様性の保全活動で活力を

対馬らしさをみつけ・活かし・継承する

MIIT事務局長 富永 健



対馬島：福岡市から壱岐島を経て147kmにある国境の島。平成16年、島内6町が合併し対馬市に。市全体の面積707.42km²、人口29,967人(令和2年3月末日現在)。朝鮮半島まで約50kmと近く、古来、大陸との文化や経済の交流の窓口となってきた。固有種や大陸系の動植物も多い。

自然が豊かな国境の島

対馬は、九州本土と朝鮮半島の間位置する国境の島です。南北に七〇キロメートルほどと長く、北方領土を除くと国内では佐渡島、奄美大島に次ぐ面積を誇ります。

中国の歴史書『魏志倭人伝』において最初に登場する日本の島であり、古くから大陸とわが国を結ぶ最前線の地として、元寇や秀吉の朝鮮出兵、日露戦争など教科書でも目にする機会が多いと思います。

また、ツシマヤマネコをはじめとした固有の動植物が多く生息しています。植物・魚・昆虫・鳥など生物多様性の宝庫として、バーダーなどの愛好家や研究者の注目を集める島でもあります。近年では、カワウソの痕跡が多く発見されて注目を集めました。

筆者が事務局長を務める一般社団法人MIIT(以下、MI

I)は、対馬の北部・旧上県町(かみあがた)にあります。ここは、日本最北西端の岬「棹崎」(さざなみ)に環境省野生生物保護センター(通称・ヤマネコセンター)が置かれており、島内でも屈指の自然が豊かな地域です。町内を流れる仁田川の上流には、日本在来馬の対州馬(たいしゅうま)を繁殖・育成する目保呂ダム馬事公園があり、付近では春に桜、夏には川での鮎釣りやキャンプを楽しむことができます。また、秋には対州馬が活躍する「初午祭」(はつなまつり)が開催されるなど、人里離れた秘境ですが、四季折々の楽しみがあります。

デザインと生物多様性の保全が事業の柱

MIITは、島おこし協働隊(地域おこし協力隊)の二名が任期を終えた後も対馬に住み続けるための受け皿として、



対馬の固有種「オウゴンオニユリ」。

二〇一三年に設立された組織です。当時、対馬市の域学連携事業（総務省所管・二〇一二年年度補正予算）が採択され、大学生の受け入れや地域関係者との連絡調整など、中間支援を担当する事業者が必要とされていました。そこで、協働

隊員の任期が満了する一年前に、吉野元（現代表理事と筆者の二名体制で創業しました。MITは、「地域の資源や魅力をもつ（M）、活かし（I）、多くの人につないでいく（T）」という企業理念を表しています。

当初は、上原町志多留地区の古民家を改修して事務所としましたが、現在は同じ町内の佐須奈地区に移転しています。移転に際しては、有人

国境離島交付金を活用し、少し前までトンネル工事の現場事務所として使われていた空き物件を改修しました。

MITは、「島デザイナー」と「生物多様性保全担当」という二名の協働隊の活動を中心事業として設立した法人であり、いままこれらの業務が核となっています。

「島デザイナー」の活動は、島の固有種や観光名所など島に関連するさまざまな事柄を絵に描き起こすことから始まります。ツシマヤマネコの絵を目にすることが多いかと思いますが、ほかにも魚介類や植物、観光地などをイラスト化し、グッズの制作、報告書やパンフレットの内容を分かりやすくするための挿絵などに活用しています。

もう一方の「生物多様性保全」の事業内容は、主にコンサルティング業務です。創設から五年間、対馬市が主催する実践型短期合宿「島おこし実践塾」の運営支援を担ったほか、同市の総合計画策定のための支援業務を受託しました。近年は、農業や地場産業がツシマヤマネコの生息環境へ与える影響と持続可能な産業のあり方に関する調査事業、対馬沿岸の磯焼け対策に向けた「食害生物」の調査研究業務など、環境・自然分野でのコンサルティング業務が増えています。

このほか、事務所に「いきもの雑貨店」を併設し、自社制作のグッズ類などを販売しています。また、島内の作家さんが作っている真珠のアクセサリーや対州馬の木彫なども並べること、ただの雑貨店ではなく「対馬の良いも

の」を扱うセレクトショップとなるように運営しています。



事務所に併設する「いきもの雑貨店」の店内。

地域の特長をスクールバスの外装に

島デザイナーが協働隊の頃から継続している業務に、スクールバスのラッピングデザインがあります。

対馬では人口減少にもなつて小・中学校の統合が進められており、毎年のように島内のどこかの学校が閉鎖している状況です。閉校となった学校の児童・生徒が統合先の学校へ通学するために、スクールバスが新しく導入されますが、このバスの外装にラッピングするため、その地域の

歴史や特徴的な動植物をデザイン化しています。

バスのデザインには、通い慣れた学校をなくした子どもたちが、少しでも明るい気持ちで新しい学校へ通うことができるように、との思いが込められています。

また、自分たちの卒業した学校が廃止された地域の大人たちにも少なからず喪失感があります。学校がなくなることは、地域の活力が失われることにもつながりかねません。このバスが走ることで、少しでも地元力の維持につながればと考えています。

ほかに、対馬空港の到着ロビーの入り口にある対馬の



対馬空港の到着ロビーでは、島の生き物のイラストが出迎えてくれる。

生き物のイラストや、比田勝港国際ターミナル内で季節ごとに掲示するイラストなどもデザインしています。デザイナー自身が対馬に住み、島の魅力を見出してイラスト化できることがMITの強みになっています。

食害生物の商品化による藻場の再生

対馬では、この二十年ほどの間に藻場の衰退が進んでいます。市では、イスズミやアイゴなどの海藻を食べてしまう食害生物の商品化に向けた調査研究業務を行なってきました。MITは、この調査業務を二〇一八年度から受託しています。

イスズミには独特の臭みがあるため、一般的には食用の魚とは考えられていません。ところが、島内で飲食業を営む有限会社丸徳水産の犬束ゆかり専務が、イスズミを美味しく食べるための商品開発を進めており、MITでは同氏がイスズミ料理を島内外に広める際の支援を行なっています。

具体的には、島内では、市民が研究者や学生たちとともに島について学ぶ「対馬学フォーラム」(主催:対馬市)にて、イスズミ・アイゴ料理の試食会を実施したり、レシピ集の制作・配布などを行ないました。島外では、魚食の普及・促進を目的に開催された「第七回Fish-1グランプリ」(主催:国産水産物流通促進センター)の国産魚ファストフィッシュ商品コンテストに、イスズミを使った「そう介のメン



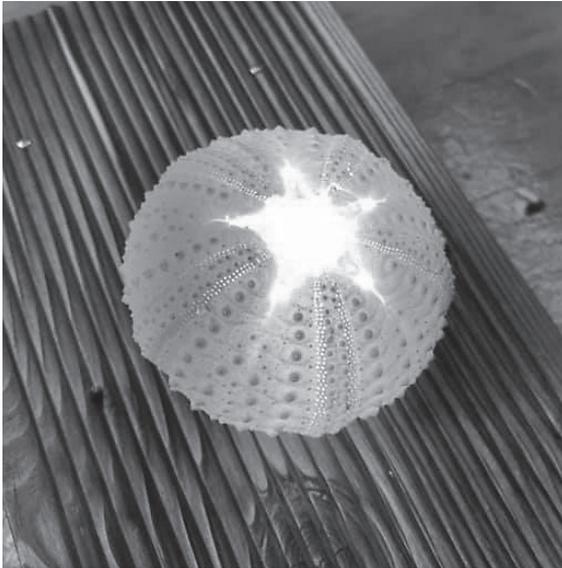
Fish-1グランプリ(2019年)の表彰式。前列中央が丸徳水産の犬束ゆかり専務。

チカツ」と題した商品を出品し、三〇団体五一種類の商品の中でグランプリを獲得しました。

これらの取り組みを通して、イスズミやアイゴなどの食材としての利用価値が認知されていくことで、有害生物が漁師の漁獲対象となり、結果として藻場の食害による磯焼けが軽減されると期待しています。

このほかウニの仲間のガンガゼ(毒ウニ)も磯の海藻を食べてしまうことで知られています。ムラサキウニやバファンウニと比べ食用としての価値が低く、毒のあるトゲが長く突き出しているため有効に活用できていません。イシダイなどの釣り餌として利用されていますが、一つで五〇円から一〇〇円程度の価格です。

もし、これ以上の価格で活用することができれば、漁師たちも捕獲に協力してくれると考え、漂着したウニの殻を置物として活用している事例があることを知りました。その後、これをヒントに対馬で漂着物アートを制作している小宮翔さんに協力していただきながら商品化を検討しました。試行錯誤の結果、現在では、ガンガゼの殻の薄さと造形の美しさを活かしたガンガゼのランプ(通称「うにぼたる」)に加工して販売しています。



有害生物のガンガゼを活用したランプ「うにぼたる」。

あわせて、対馬市立佐須奈中学校の総合学習のテーマに「磯焼けの環境教育」を取り上げていただき、生徒が漁師や漁師から島の漁業とガンガゼの関係を調べたり、「うにぼたる」を販売するためのマーケット調査の実施などの取り組みにもつなげています。

この総合学習でガンガゼの利活用に取り組んだ生徒の一人が、対馬少年の主張大会で最優秀賞を受賞しました(註)。

これは私たちにとって大きな喜びとなっています。

(註) 発表内容は、広報つしま令和2年3月号に掲載。
<http://www.city.tsushima.nagasaki.jp/live/kouhou/images/202003/kouhou202003.pdf>

地域に必要とされる組織を目指して

食害生物と同様に深刻な課題となっているのが、イノシシ・シカの増加です。これは、筆者の移住前から顕在化していた課題ではありますが、この七年間でその個体数が驚異的に増え、野山にあった希少な植物が絶滅に瀕し、それ以外の植物までもが減り続けています。その結果、山林の下層植生がなくなり山肌がむき出しとなり、台風のたびにあちこちで土砂崩れが発生するようになりました。

また、道端の植物が減っていくにつれて、道路沿いに捨てられたたくさんさんのゴミが目立つようになりました。これらのゴミは、以前は投棄された場所で雑草の中に埋もれていたようですが、近年は雨風を受けて飛散し、川を下って海に流れ出しているようです。

島内には、集落の有志が集まって「有害鳥獣捕獲隊」を結成している地域もありますが、食害をなくせるほどは効果が上がっていないのが現状です。地域の努力によってイノシシ・シカの適切な個体数を維持できるようにすることが最終的な目標ではあるものの、まずは現状の増えすぎた個体数を適正な水準まで減少させるため、外部のハンターを一気に投入するような狩猟圧が必要な時期に来ているように感じています。

いずれにせよ、個体数がこれ以上に増加すれば住民の安全な暮らしを脅かすことにもなりかねません。私たち一人

ひとり危機感を持ち、対馬が一体となって取り組んでいかなければならないと思っています。

創業から二三年の間は、対馬市の事業の受注が主でした。しかし、最近ではさまざまな方々からお仕事をいただいております。立ち上がりの時期には「役所の仕事が頼り。補助金目当ての活動だろう」など、厳しい言葉をいただくこともありましたが、なんとか七年目を迎えることができました。どこの馬の骨ともわからない、何の実績もない零細ベンチャーに大きな仕事を任せてくれた行政の方々は、相応な覚悟を持ってもらったのだと思います。また、MITからの無理なお願いを快く受け入れてくださった地域の皆様にも感謝が絶えません。今後も、地域課題の解決のために地道に取り組んで参ります。



富永 健 (とみながけん)

1972年、東京生まれ。国土交通省離島振興課員として担当した「アイランダー2012」での島の人々との交流をきっかけに、2013年、東京から対馬へIターン。都会の人を島に移住させようとして自分が移住してしまったため、「ミイラになった元ミイラ取り」を自称。